はじめに

漁の技と日本の豊かな海

日本はまわりを豊かな海に囲まれており、また川や湖などもあります。それらは大昔からわたしたちのくらしに、かけがえのないめぐみをもたらしてくれました。縄文時代の遺跡である貝塚から魚の骨や貝のからが見つかり、1万年以上の昔からすでに魚や貝を食べていたことがわかっています。当然これらを得るためには、陸地から銛や網を使ってつかまえたり、舟で海に出て、釣り針や銛、網を使い魚をとったりする技術が必要でした。魚の種類により、いる場所や逃げ方など性質がそれぞれちがうので、漁具やとり方も工夫されていきました。また時代がすすむにつれ、漁法も発達しました。多くの魚をとるために人々が集まり漁村ができ、魚介類を売るための仕事もできました。それらは漁業として発展していきました。

この本では、これら「漁の技」の世界を紹介していきます。日本の漁とわたしたちのくらし、進化しながら受けつがれてきた代表的な漁法の技、漁の最新技術、漁の歴史などを知ることで、日本の漁の技術のすばらしさがわかるはずです。

江戸前の網漁『東都富士見三十六景 佃沖晴天の不二』一勇斎国芳 画

もくじ

漁の世界へようこそ・・・・・4
いろいろな漁……4
漁場にめぐまれた日本……6

伝統漁の技を見てみよう・・・・・8
定置網漁のスゴ技……8
延縄漁のスゴ技……10
まだある伝統漁……12

伝統漁で活躍したもの・・・・・・16

漁法の最新技術・・・・・18

とる漁業から育てる漁業へ・・・・・20

魚がとどくまで　今と昔・・・・・・22

魚をじょうずに食べよう・・・・・24

もっと漁を知ろう・・・・・・26
人々と漁の歴史……26
マグロと日本人……28
漁と祭り……30
漁の仕事をするには……31

漁場にめぐまれた日本

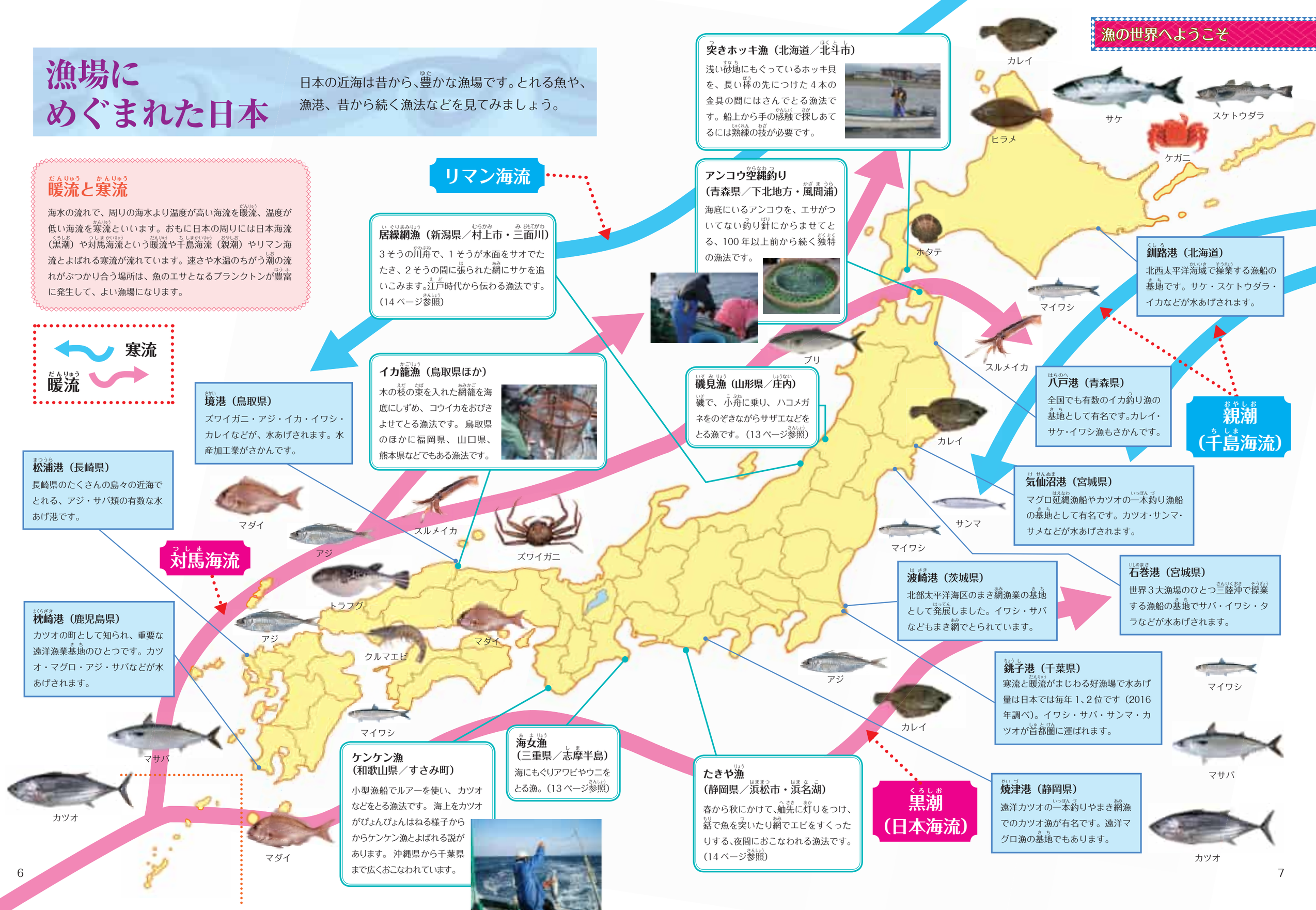
日本の近海は昔から、豊かな漁場です。とれる魚や、漁港、昔から続く漁法などを見てみましょう。

暖流と寒流

海水の流れで、周りの海水より温度が高い海流を暖流、温度が低い海流を寒流といいます。おもに日本の周りには日本海流（黒潮）や対馬海流という暖流や千島海流（親潮）やリマン海流とよばれる寒流が流れています。速さや水温のちがう潮の流れがぶつかり合う場所は、魚のエサとなるプランクトンが豊富に発生して、よい漁場になります。

寒流

暖流



突きホッキ漁（北海道／北斗市）

浅い砂地にもぐっているホッキ貝を、長い棒の先につけた４本の金具の間にはさんでとる漁法です。船上から手の感触で探しあてるには熟練の技が必要です。

アンコウ空縄釣り（青森県／下北地方・風間浦）

海底にいるアンコウを、エサがついてない釣り針にからませてとる、100 年以上前から続く独特の漁法です。

居繰網漁（新潟県／村上市・三面川）

３そうの川舟で、１そうが水面をサオでたたき、２そうの間に張られた網にサケを追いこみます。江戸時代から伝わる漁法です。（14 ページ参照）

釧路港（北海道）

北西太平洋海域で操業する漁船の基地です。サケ・スケトウダラ・イカなどが水あげされます。

八戸港（青森県）

全国でも有数のイカ釣り漁の基地として有名です。カレイ・サケ・イワシ漁もさかんです。

イカ籠漁（鳥取県ほか）

木の枝の束を入れた網籠を海底にしずめ、コウイカをおびきよせてとる漁法です。鳥取県のほかに福岡県、山口県、熊本県などでもある漁法です。

磯見漁（山形県／庄内）

磯で、小舟に乗り、ハコメガネをのぞきながらサザエなどをとる漁です。（13 ページ参照）

境港（鳥取県）

ズワイガニ・アジ・イカ・イワシ・カレイなどが、水あげされます。水産加工業がさかんです。

松浦港（長崎県）

長崎県のたくさんの島々の近海でとれる、アジ・サバ類の有数な水あげ港です。

気仙沼港（宮城県）

マグロ延縄漁船やカツオの一本釣り漁船の基地として有名です。カツオ・サンマ・サメなどが水あげされます。

波崎港（茨城県）

北部太平洋海区のまき網漁業の基地として発展しました。イワシ・サバなどもまき網でとられています。

石巻港（宮城県）

世界３大漁場のひとつ三陸沖で操業する漁船の基地でサバ・イワシ・タラなどが水あげされます。

枕崎港（鹿児島県）

カツオの町として知られ、重要な遠洋漁業基地のひとつです。カツオ・マグロ・アジ・サバなどが水あげされます。

銚子港（千葉県）

寒流と暖流がまじわる好漁場で水あげ量は日本では毎年１、２位です（2016 年調べ）。イワシ・サバ・サンマ・カツオが首都圏に運ばれます。

ケンケン漁（和歌山県／すさみ町）

小型漁船でルアーを使い、カツオなどをとる漁法です。海上をカツオがぴょんぴょんはねる様子からからケンケン漁とよばれる説があります。沖縄県から千葉県まで広くおこなわれています。

海女漁（三重県／志摩半島）

海にもぐりアワビやウニをとる漁。（13 ページ参照）

たきや漁（静岡県／浜松市・浜名湖）

春から秋にかけて、舳先に灯りをつけ、銛で魚を突いたり網でエビをすくったりする、夜間におこなわれる漁法です。（14 ページ参照）

焼津港（静岡県）

遠洋カツオの一本釣りやまき網漁でのカツオ漁が有名です。遠洋マグロ漁の基地でもあります。

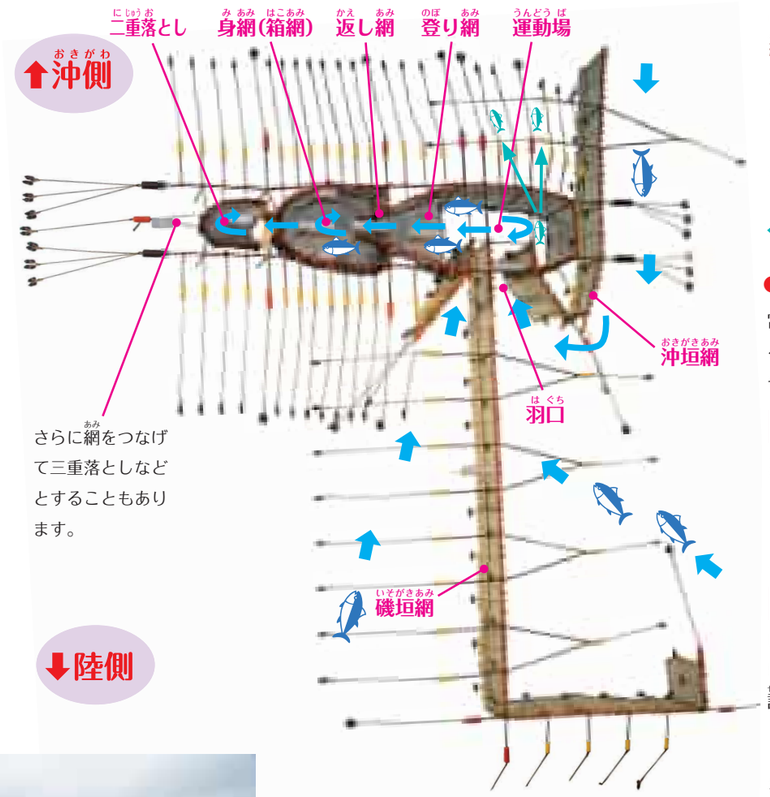
伝統漁の技を見てみよう

定置網漁のスゴ技

定置網漁は、波がおだやかな湾で発展してきました。昔の人の知恵がいっぱいつまった漁を見てみましょう。

越中式落とし網の例（模型）

垣網より運動場、運動場より身網、身網より二重落としと、どんどん網目が細かくなっています。運動場の網は、小魚なら逃げられる網目です。



さらに網をつなげて三重落としなどとすることもあります。

船の上から見た定置網。黄色のブイの下に網がたれています。

●定置網データ（脇地域の沖の場合）

身網（箱網）の大きさ…幅約 60 m、長さ約 105 m、深さ約 50 m
海の深さ…約 50m（網は潮の流れで動くため 70 ～ 80m を用意）
網を固定させるおもり…1500t（石をつめた 50kg の袋を約 3 万個）
網の製作日数…3 か月半～半年
網を新たに設置するには…約 1 か月
網の交換…7 ～ 10 日間

定置網のしくみ

波がおだやかで、魚が多く集まる湾に網をしかけて、そこに入りこんできた魚をとるのが定置網漁です。江戸時代初期から、魚の習性や海のことがわかっていたからこそ発展した漁といえます。それぞれの地域の特徴にあわせていろいろなかたちの定置網漁が、今も日本各地でおこなわれています。

氷見の定置網の進化

●氷見の定置網、400 年の歴史

富山県の氷見の定置網漁は、江戸幕府が開かれる前後の時代にはじまったといわれています。その発展の様子を見てみましょう。

江戸時代

網は稲わらでつくられ、季節により、とる魚に合わせて網を入れかえていました。古い網は切り、そのまま海の底に落とされ、魚の寄りつき場や産卵場になっていました。

幕末～

じょうぶで潮流にも強い、麻糸による網が登場します。今までおけなかった場所にも定置網の設置が可能になり、漁場が広がりました。

明治時代～

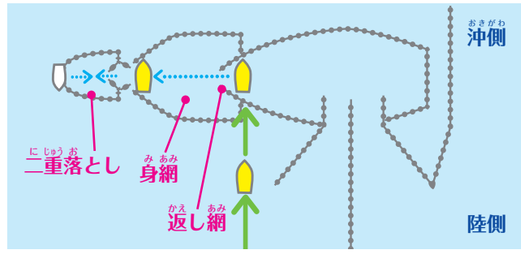
機械工業による綿糸の網が登場します。より大規模なしかけが可能になり、大正時代末期から昭和初期に、今も続く越中式落とし網が登場しました。

昭和時代～

化学繊維の網が広まり、網が長もちするようになりました。こうして網の発達とともに、氷見の定置網漁の技は海外へも広まっています。

第八中波丸の 定置網漁の流れ

息のあった作業がたいせつ



船は陸地側からまっすぐ進んで、返し網のところへ横向きにつけ、全員（9 人）でならんで網を引きあげながら、その力で横向きのまま進んでいきます。そうすることで、身網にいる魚が、少しずつ前方へ逃げ、二重落としに入っていく、というわけです。その二重落としに入った魚をさらに集めて水あげします。網を引きあげるとき、息があわないと船が斜めになったり、網の間に魚がはさまったりするので注意が必要です。

❶ 準備をして出港

03:15 出港

綱を引きあげる道具や、とった魚の鮮度を保つための氷などを、船に積んで港を出ます。

❷ 網内の魚を追いこむ

03:30 漁場到着

船の左側にある 4 基の揚網機と人力で網を引きあげていき、足元にたまった網は海にもどす、そのくり返しが続きます。船頭は左右を確認しながら、問題があれば、みなを止めて調整し、「せーの！」のかけ声でまたいっせいに作業を開始させます。

03:35 作業開始

❸ もう 1 隻でカギを開ける

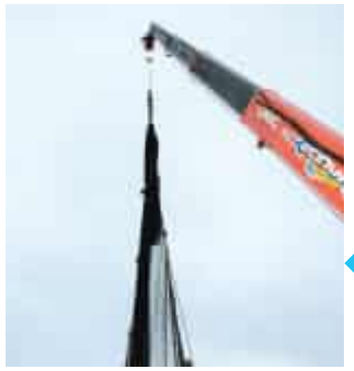
水面近くの作業がしやすい小船は、先回りして網の閉じている口（カギ）を開けます。

04:30 小船も網の引きあげ開始

❹ はさみうちにする

小船と両方から網を引きあげ、一か所に魚を集めます。

04:45 クレーンで網を投入



❺ 網を投入

クレーンでモッコという網をつりあげ、集めた魚をすくい出し、あらかじめ海水と氷を入れた船底に入れます。もっとも活気の出る場面です。

❻ 魚の水あげ

05:15 帰港

港へもどり、魚を水あげし、仕分けして市場へ運びます。なれた手つきで次々と魚を箱に入れていきます。

伝統漁で活躍したもの

昔ながらの漁で活躍したものと、現在おもに使われているものをくらべながら見てみましょう。素材や動力は変化しても、伝統の技を受けつぎながら発展しているのがわかります。

フネ（舟／船）

テンマ（約 5.3m）

富山湾あたりでつくられた、小型船のよび名です。サザエや海藻類をとる磯の漁などでおもに使われました。「先を細くして早く進むように」「小回りが利くように短く」など、漁師一人ひとりの要望にあわせて船大工がつくっていました。

ドブネ（約 15 m）

※写真は 1/10 サイズの模型

1960 年ごろまでつくられていた、定置網漁用の大型船です。一度に大量の魚がとれる網漁にあわせ、箱型で安定したつくりにして、船底に魚を入れられるよう、大きなスペースをとっています。

今

定置網漁の漁船

強化プラスチックという素材などにより、型でつくられています。

マグロ漁の漁船

鋼鉄などでじょうぶにつくられています。急速冷凍室もあります。

作業着

刺し子

布を 2 枚以上重ねて全体にぬい目を入れたものを刺し子といいます。これは古着をぬいあわせてつくられています。じょうぶで暖かいのが特徴です。

さき織

古い布をさいてひも状にしたものと糸を織りあわせた生地でつくってあります。今でいうリサイクルでしょうか。モノをたいせつに活用するだけでなく、じょうぶで暖かいので寒い海上での作業に向きます。

今

防水カッパ

軽くて動きやすい防水カッパがおもに使われています。

ウキ（浮）

木製のウキ（浮）

スギやキリ、タケなどを、網をしかけるために浮として使いました。切りこみは、網や縄を結んで固定しやすくするために入れています。

今

樹脂製の浮

海水浴場やプールのコースロープなどでも見られる浮です。

ビンダマ（びん玉）

1940 年代後半から使われるようになった、ガラス玉製の浮です。木のようにくさることはありませんが、割れやすい素材でした。

アミ（網）

ワラアミ（わら網）

稲わらでつくられた網は江戸時代から使われていました。左は編んで、右は織ってつくっています。その後、麻糸や綿糸の網が登場しました。

今

定置網漁用の網

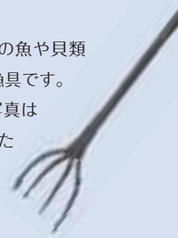
◀大きな作業場全部の網が、1 つの定置網の半分の量。別の作業場でもう半分がつくられています。漁の種類にあわせて化学繊維を選び、最適な網になるよう、年々研究を重ねてつくられています。

▶アバリ（網針）で網とロープをつなぐ作業の様子です。素材は変わっても、網を仕立てる道具は昔のまま受けつがれています。

その他の道具

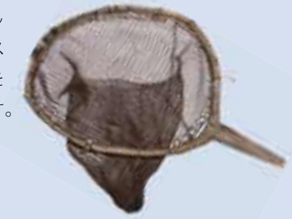
ヤス

おもに海底にいるカレイなどの魚や貝類などを突き刺してとるための漁具です。「突き銛」ともいわれます。写真は能登半島沿岸でカレイをとるために使われていました。



タモ

魚をすくいあげるための網です。左右均等に枝がのびるモミの木を使い、枝を輪にして網をつけました。持ち手はスギなど別の棒をくくりつけます。



ハコメガネ（箱眼鏡）

箱の広いほうにガラス板がはめこまれ、そこを海面につけ、海底をのぞくための道具です。氷見では「ノゾキ」ともいわれます。磯でサザエや海藻などをとる漁に使います。

ほかの道具も調べてみよう！

漁では、ほかにも釣り針や釣り竿、釣り糸、銛など、いろいろな道具が使われます。どの漁にどんな道具が使われるのか、その道具がどのように変化してきたのかなど、身近なところから調べてみるとおもしろいでしょう。